

大垣北 Jr ベースボールラボ ～高校生がつくる未来の地域スポーツ～

岐阜県立大垣北高等学校 校長 小野 悟

1 本校の概要

本校は令和6年度に学校創立130周年を迎える長い歴史と伝統を有する普通科高校である。「誠実・友愛・努力」の生活信条のもと、学業のみならず、部活動や探究活動、ボランティア活動に励む生徒も多い。特に探究活動は、平成30年度までの文部科学省指定のスーパーグローバルハイスクール(SGH)事業、一昨年度まで県指定の地域共創フラッグシップハイスクール(FRH)事業を引き継ぎ、昨年度より県指定のグローバル探究実践事業の中で、地域と連携を図りながら、探究活動を通して、グローバルな視点を持ったリーダーの育成を目指して教育活動に励んでいる。卒業生の数は41,000名を超え、政治・経済・文化等さまざまな分野において、本県はもとより広く国内外で活躍されている。

2 実践の始動

本校では「総合的な探究の時間」において、1年生では学校所在地でもある大垣市が掲げる「大垣市未来ビジョン」に基づき、市役所の職員による講演を皮切りにして地域の課題解決に取り組んでいる。また、2年生では6つの分野(教育、医療、開発、資源、農業、スポーツ)の中から自らが選ぶ分野に関する探究活動を行い、グローバル社会において活躍できる素養を身につけている。

この実践は当時1年生であった野球部員が「小・中学生の運動能力、運動時間の低下に関する新聞記事」を見たことがきっかけで始まった。コロナ禍により加速した小・中学生の運動離れは地域のスポーツ少年団の団員数減少にも影響を与えている。部員がかつて所属していた少年団含め、市の野球少年団に登録している小学生は直近10年で3分の1まで減少をした。少子化が進行し、かつコロナ禍により運動時間が減少、加えて少年団加入状況も悪化した。「総合的な探究の時間」において地域のことを調べる中、こうした状況を知り、その課題解決のために企画・立案をし、他の部員や顧問の助言を受け、動き出し、令和5年1月22日をこの取り組みが開始された。

3 実践の概要

令和4年3月25日に策定された第3期「スポーツ基本計画」においては、『スポーツを「つくる／はぐくむ』、『「あつまり」、スポーツを「ともに」を行い、「つながり」を感じる。』、『スポーツに「誰もがアクセス」できる。』という「新たな3つの視点」が示された。

しかし『令和3年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査報告書』によると現状は、小学生の1週間の総運動時間男女ともに令和元年以降、体力合計点は下降傾向にある。こうした状況を踏まえ、本校の実践はスポーツ庁の基本計画の趣旨に沿い、以下の3点を目的とした。

- ① 地域の子ども達が続的にスポーツや学習に取り組むことができる環境を作る
- ② 異年齢との関わりを通じ、互いの価値観を刺激し、長期継続的な人的交流を作る
- ③ 新たな競技ベースボール5を通じ、野球人口減少の解決の一助とする

以上について説明を加える。

①については、前述のとおり、小学生の運動能力の低下という現状に対し、継続的に取り組むことができる運動習慣が必要となる。高校のグラウンドという比較的整備されている環境のもと、そして、普段とは異なる環境で運動をすることで小学生は集中力が高まり、強いインパクトを受ける。野球部という入り口はあるが、他の部活動からの協力を得ている点も特徴的である。例えば、陸上部からは速く走る方法を、トレーニング要素を入れながらレクチャーを受ける。またバドミントン部からはオーバーヘッドスポーツを遊びながら経験することで、肩関節の可動域を高める意図を込めている。(バドミントン部からのレクチャーは今後予定)。また長期休暇中は学習面でのサポートも行う。小学生2～3人に対し、高校生が1人つき、躓きの解消の手助けをする。また隣で高校生も学習に向き合っている姿を見ることで、学習の仕方、学び方を学んでいる。

②については、異年齢交流は互いの自己肯定感、自己効力感を高めることに繋がる。学校内では同

世代間と教員という大人との関係性が作られるが、ラボでは小学生と高校生という普段関わることが少ない関係を築くことができる。小学生は身近な「お兄さん」「お姉さん」として憧れの対象としてとらえ、その対象から伝えられること、教えられることを真摯に受け止める。また、高校生側は小学生の成長のために、根拠に基づき、理解しやすい言葉を選びながら説明をする。そのアウトプットのために、常日頃のインプットが、より加速度的に進む。「自分のために」という軸から、「小学生のために」「自分のことを必要としてくれている人のために」という軸へと発展する。

③については、野球人口減少の解決の一助とするべく、ベースボール5の実施をその一つと考えた。ベースボール5とは(英: Baseball15)は、野球(ストリートベースボール)を原型として考案されたスポーツである。2018年に世界野球ソフトボール連盟(WBSC)によって考案された。WBSCからは、野球・ソフトボールに次ぐ第3の競技として認定されている。ゴムボールさえあればどこでもプレーできることが特徴で、フィールドも野球・ソフトボールと比べてコンパクト化されている。男女混合でプレーすることが想定されルールが作られている。2026年ダカールユースオリンピックの正式競技として採用された。現在各地で学校の体育の授業に取り入れる動きが進んでおり、体験会が実施されている。本校所在の大垣市でも体験会が実施され、小学生は学校の垣根を越えてチームを作り、プレーしている。本校で実施する際は、小学生の保護者の方々にも参加してもらい、高校生も交えて3世代で同じスポーツに触れている。ハンドベースボールに比べ、ボールが固く、捕る・投げるといった動作が明確にできるため、野球に繋がりがやすい。楽しさを感じた小学生が平日に友達を誘い、ベースボール5を行うことで、野球人口増加へと繋がることを期待している。

4 具体的取組

(1)日程調整

2~3週間に1度の頻度で実施をする。参加小学生が所属するスポーツ少年団に連絡を入れ、MicrosoftFormsを用いて出席をとる。できる限り多くの小学生が参加しやすいように、曜日は固定していない。開始時間は小学生の下校時間に合わせており、活動時間帯は2時間を基本としている。

(2)高校生の動き

当日の動きは全て高校生が指揮をとり、行う。高校に到着した小学生の誘導や保護者の受け答え、全員が揃うまでの時間の有効的活用など臨機応変に動く。練習メニューは生徒が考案する。体力テストが近い時期は50m走や立ち幅跳びのメニューが組まれた。シーズンに入れば、バッティングとノックを中心とした実践練習、オフシーズンには基礎的な練習やトレーニングの要素も取り入れた遊びなど、時期に応じたものを実施している。疾走タイムを正確に測定する光電管や投手の球速や球質を測定する機器(ラプソード)を活用し、小学生の能力の現在地を知り、必要となる練習やトレーニングの考案へと繋げている。また、練習の最後にはミーティングを行う。褒めることはもちろんだが、話の聞き方、切り替えの仕方、継続することの重要性などを高校生から伝えている。また小学生の保護者、指導者に向けて高校生からプレゼンを行う。「中学の部活動の選択について」「小学生年代の自身の過ごし方について」などである。多方面から刺激を入れ、高校生各自が臨機応変に動いているため、行動と言動には十分な自覚と責任を持っている。

(3)IDパスの発行について

ラボへの参加は事前にID登録をする。小学校名、保護者氏名、緊急連絡先の登録を事前に行う。初回参加時にマネージャー作成のIDカードを渡す。表面には氏名と学年、裏面には目標と参加回数を明記する欄が設けられている。これまで皆勤参加者も多く、小学生自身がこのラボのメンバーであるという帰属意識が芽生えることを期待している。

(4)小学生、その保護者の動き

通常は平日開催になるため、高校までの送迎は保護者が行うが、長期休暇中の日中開催であれば、近隣の小学生は徒歩または自転車で来校する。極力各家庭の負担感を少なくし、日常の放課後の時間帯の過ごし方に変化をもたらす。

5 成果

冬季期間中に野球教室というかたちで実施するという例は他にもあるが、年間を通じて継続的に成長をサポートするシステムは全国的にも珍しく、県内では本校のみである。当初、小学生2校、ID登録者50名で始まった取組みであるが、現在では小学校14校、ID登録者は130名まで増加した。実施回数は梅雨と熱中症のリスクが高まる夏季以外であり、これまでの実施回数は17回、参加者は延べ550名を超えた。近隣の小学校を対象にスタートした取組みであるが、他地区からの参加も増えた。コロナ禍で制限された日常からの脱却と新たな日常の構築を目指したこの取組みの趣旨を理解し、変化を実感した小学生、保護者が継続的に参加をしている。

成果と課題をみるために、参加生徒と保護者にアンケートを実施した。以下その項目とその回答である。

①ラボに参加した感想(小学生)(保護者)

- ・高校生のお兄さんが、どこをどうすればいいのか、わかりやすく教えてくれました。(小学生)
- ・いろんな守備の詳しい内容(ボールの取り方など)を教えてもらって、ちょっと上手になれたのが嬉しかったです。野球以外にも、興味があることのお話を一緒にできて楽しかったです。(小学生)
- ・毎回募集の連絡がメールでくるたびに、2つ返事で参加を希望し、習い事を振替してでも参加したい、ということでも楽しんで参加をしているようでした。普段、なかなか関わる機会のない世代の方に野球を教えてもらったり、お話をしたりするのがとても楽しかったです。私が初回に参加しお話を聞く中でも、野球や練習を理論的に解析し、生活を含め、実践練習をされる姿勢が興味深かったです。この先、息子にもそうした部分に深く興味を持ってもらえるといいなあ、と思っています。(保護者)
- ・子どもへの言葉掛けがいつも温かく、本当にいい機会をいただけていると思います。子どもは、毎回、楽しかった！もっとやりたかったと喜んで帰ってきます。とても有意義な活動をされていると思います。(保護者)

②小学生の平日の放課後の変化、野球の取組みの姿の変化

- ・普段放課後に野球をする機会、とにかく場所がなくなった事でこういった機会は非常にありがたいと感じます。
- ・普段関わることのない高校生の方々と野球をすることで、ちょっと目標ができたような感じがする…そうです。自分も北高で野球がやりたい！女の子ですが…そんな目標ができて、漢字テストの勉強をがんばったりしていました。

③技術の変化

ラボ参加前を5とした場合の10段階の自己評価 6.82 (5月実施) ⇒7.17 (10月実施)

④野球へのモチベーションの変化

ラボ参加前を5とした場合の10段階の自己評価 7.65 (5月実施) ⇒8.22 (10月実施)

⑤勉強へのモチベーションの変化

ラボ参加前を5とした場合の10段階の自己評価 6.29 (5月実施) ⇒6.00 (10月実施)

⑥ラボへの要望、期待すること

- ・これから野球と勉強を両立する為に、コツというか、どのように勉強をしているのか、教えていただきたいです。
- ・野球をやったことのない小学生もラボに参加して、野球に興味を持ってくれる子が増えるといいなと思います。

また企画・運営を担う高校生側そして見守る教員側にも変化があった。2つの波及効果である。一つ目は校内での波及効果である。野球部のみならず、他部の生徒が各々の専門分野に関するレクチャーをすることで、学校内でラボへの興味・関心が沸きつつある。普段関わることのない年齢層の小学生が敷地の中で活動をしている様子を足を止めて見学していく生徒もいる。また他部の教員が見学を訪

れる場面も多い。2つ目は校外への波及効果である。他県、他校からの問い合わせも増えた。または市の体育連盟のスポーツ少年団担当の方々、市役所の地域創生戦略課の職員の方々など多く来校いただき、活動の様子をご覧いただき、体育連盟の広報誌にて紹介をしていただいた。また第3回 Sport in Life アワード（スポーツ庁主催）の団体部門優秀賞に選出いただいた。優秀賞は岐阜県初、高校生の受賞は全国初である。

6 課題

実施する側の高校生のメンバーのみならず、関わる教員の転勤も今後考えられる中、持続可能な活動にしていくためのノウハウの継承、活動の意義の理解をし続けていく必要がある。そのためにも、小学生・高校生・教員にとって持続可能な活動の頻度、時間などはどこなのかをさらに模索をしていくことが問われる。またラボのような活動は各地区拠点となる学校が必要である。他校への提案、更なる波及効果を生むために発信をし続けていくことが今後の課題である。

7 提言

地域では部活動の地域移行が進み（中学）、子ども達が行うスポーツを取り巻く環境は変化を余儀なくされている。部活動の在り方が問われ、これまで以上に自分で自分を教育していく必要性が増していく。学校での活動時間は集団に属し、活動の枠があり、身を投じやすい状況にあるが、教員の働き方改革が進む中、学校での活動時間の制限も更に進行していく。この取り組みを通じてもう一つの効果が期待できる。それは高校生が進路の選択肢の一つとして教員を目指すということである。小学生にアウトプットをすることで、伝え、成長を共に感じられる魅力を実感している生徒もいる。以前から教員志望の生徒にとっては小学生との関わりそのものが教育実習のような位置づけにもなる。教員不足が叫ばれている昨今、高校生が可能な範囲で教員のような役割を体験できることは教育現場の今後の課題解決の一助となると確信している。ラボの趣旨はこのような状況を鑑み、小学生や高校生の日常に変化をもたらし、運動能力の向上を目指し、地域スポーツの活性化を図り、小学生、高校生、見守る教員の成長が促されるものである。スポーツや学習に対する内発的動機付けを促し、継続したくなるシステムや日常が必要である。近年の情報環境の充実、効率的な学びによって、高校生が持つ可能性は無限大であり、地域のスポーツ発展に大きな貢献が可能であると考え。高校が地域のハブ的な存在となり、環境と人材を駆使し、地域と密接な繋がりを構築していくことが各地域で実現することを願う。子供たちの日常的な運動習慣を、経済的な負担を強いることなく、大人ではなく、年齢の近い高校生がきっかけを作り、学校全体で受け入れる体制を作ることができれば、将来の子ども達の成長は大いに見込める。

【添付資料】



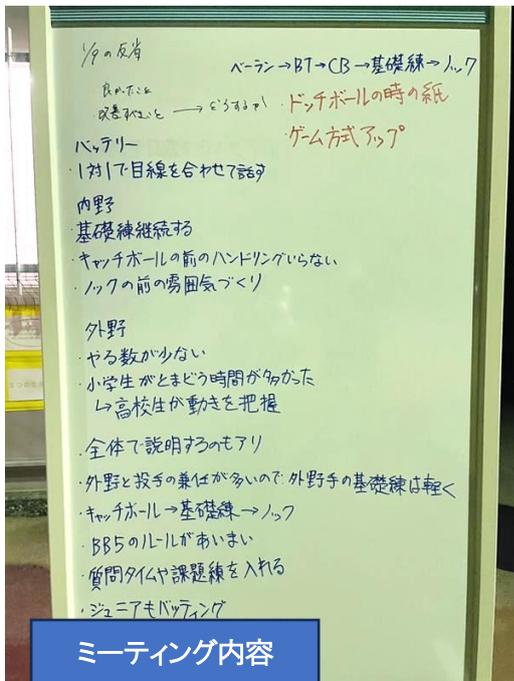
ベースボール5の正式球



三世代でのベースボール5



学習サポート



ミーティング内容



IDカード(マネージャー作成)



終了時のミーティング



陸上部による走り方レクチャー



グラウンドの土に関する話



練習風景



保護者・指導者へのプレゼン



北村教授(東京大)から学び方に関する助言